

- ・ 本日は、信用金庫の歴史についてお話したいと思います。
信用金庫は 1951年(昭和26年)6月に制定された信用金庫法にもとずき営利を目的としない、協同組織の地域金融機関として誕生しました。
- ・ 営業区域が一定の地域に限定された、中小企業や個人のための専門金融機関です。
- ・ 2018年(平成30年)3月末現在、全国に261の信用金庫があり約7300の店舗があります。
- ・ その歴史は古く、明治時代にドイツの信用組合を見習って全国各地の地主や有力者が中心になり、農民を助けるために信用組合を設立したのが信用金庫の前身です。
- ・ その後1951年(昭和26年)の新しい法律によって信用組合から信用金庫が生まれました。その時、色々な名称が考えられました。「庶民銀行」や「信用銀行」「協同銀行」などの名前の案がでました。
- ・ しかし、当時の信用組合の関係者は「銀行」と名乗るのに抵抗を感じていました。その理由は「金もうけ主義の銀行にはなりたくない」という強い思いがあったそうです。

・それを知った当時の大蔵省の舟山正吉銀行局長は、次のように話したと言われています。現在、政府系金融機関は「庶民金庫」「恩給金庫」「復興金融金庫」という「金庫」という名称を使っています。

オリンピックのメダルには、金・銀・銅がある。銀はすでに銀行が使っているし、「銅庫」でもおかしいから、この際、政府系金融機関しか使っていない「金庫」という名称を新しい門出に特別に贈りましょうと言って、名称が「信用金庫」に決まったそうです。

・その時、信用金庫の関係者は、将棋の駒の「銀」のように「銀」と「成金」を使い分けるのではなく、信用金庫は地域という「王将」のすぐそばにあって裏のない「金」でありたいと思ったそうです。

・また、幕末の社会運動家である二宮尊徳が日本における信用金庫の一つのルーツであると言われており、静岡県にある日本で一番古い「掛川信用金庫」は二宮尊徳の弟子である岡田良一郎氏によって設立されました。

- ・信用金庫の歴史の中で今でも語り継がれている人物がいます。

東京の城南信用金庫の三代目の理事長で全国信用金庫連合会の会長を27年間務めた、「小原鐵五郎」という人物です。

平成元年に89歳で亡くなりましたが、金融界のご意見番と言われていました。

- ・小原鐵五郎氏のエピソードを少しお話したいと思います。

- ・1966年(昭和41年)に金融効率化論議が行われ、その中で信用金庫を株式会社に変更して大銀行と合併統合してしまう案が政府から出され、まさに、信用金庫存亡の危機がありました。

- ・その時、全国の信用金庫に団結を呼びかけたのが小原鐵五郎氏でありました。

- ・当時、小原氏は政府委員に対して「富士山の美しい姿には誰しも目を奪われ感動するが、白い雪に覆われた頂きは、長く裾野を引いた稜線があってこそ気高くそびえるものである。

日本の経済もそれと同じで、大企業が富士山の頂きとしたら、それを支える中小企業の広大な裾野があってこそ成り立つ。

その大切な中小企業を支援するのが信用金庫であり、その役割は大きく、使命は重い」と激論を交わしたそうです。

- ・その時、銀行局長であり、後の日銀総裁になった澄田智氏が感心して、小原氏に好意を持ち澄田銀行局長の力により銀行に合併統合する案は廃案になりました。
- ・この様に色々な主張を熱心に行った事で小原氏は当時、大蔵官僚から「グズ鉄」とあだ名がついたそうです。
- ・また小原氏が生前よく話していた事は「銀行は金儲けのためにお金を貸すが、我々信用金庫はお客様のお役に立つようにお金を貸す。貸したお金がお客様の役に立ち感謝されて返ってくるような生きたお金を貸さなければならない」と述べそこから小原氏の「貸すも親切・貸さぬも親切」という言葉が生まれました。現在も、信用金庫の理経営理念として残っています。
- ・小原氏は平成元年に 89 歳で亡くなったのち、自ら設立していた奨学育英基金に全財産の 100 億円を寄付されました。

・最近、「かぼちやの馬車」で有名になった銀行が問題となっています。以前、森金融長長官がその銀行の姿勢、ビジネスモデルについて素晴らしいと絶賛していて、まさに「地方銀行の成功モデル」として推奨していました。が事件発覚後、森金融庁長官は7月に退任しました。

・時代が変わっても地域と共に生き、お客様との絆を大切にする信用金庫の本来の姿は変わりません。信用金庫が銀行と異なる独自性を示して更なる存在感を示すために、これからも、フェイス・トゥ・フェイスの営業活動により、庶民の味方の金融機関を目指し「将棋の金」である事の自信と誇りと情熱を持って、地域のお客様に接していきたいと思えます。

ご清聴ありがとうございました。